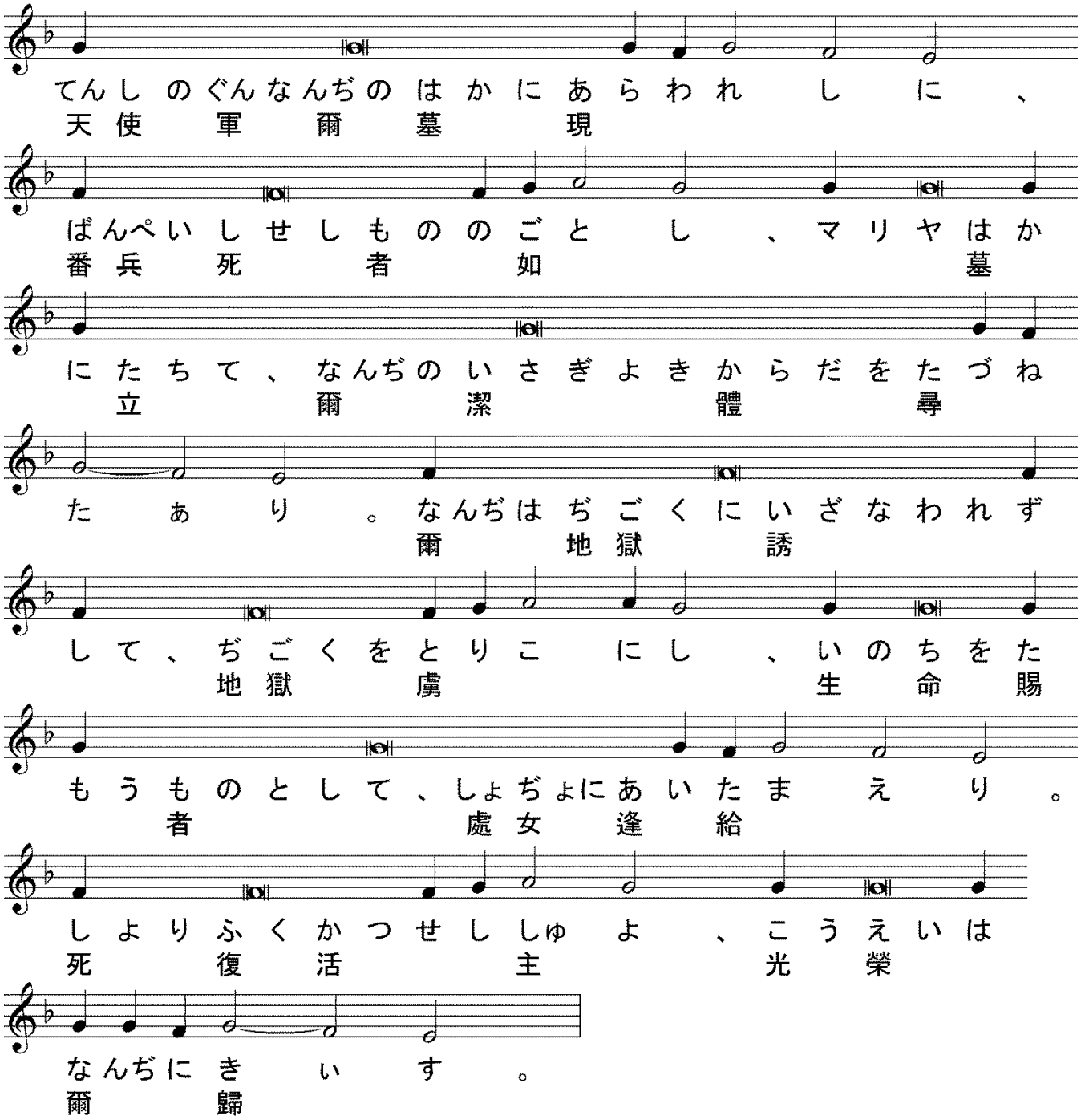
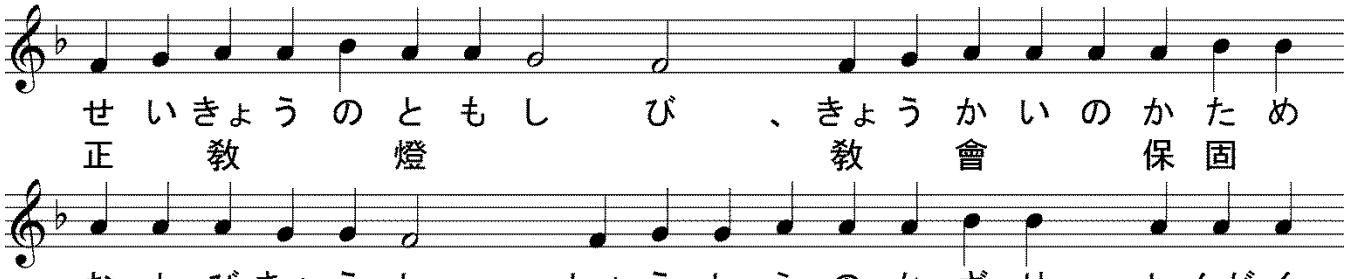
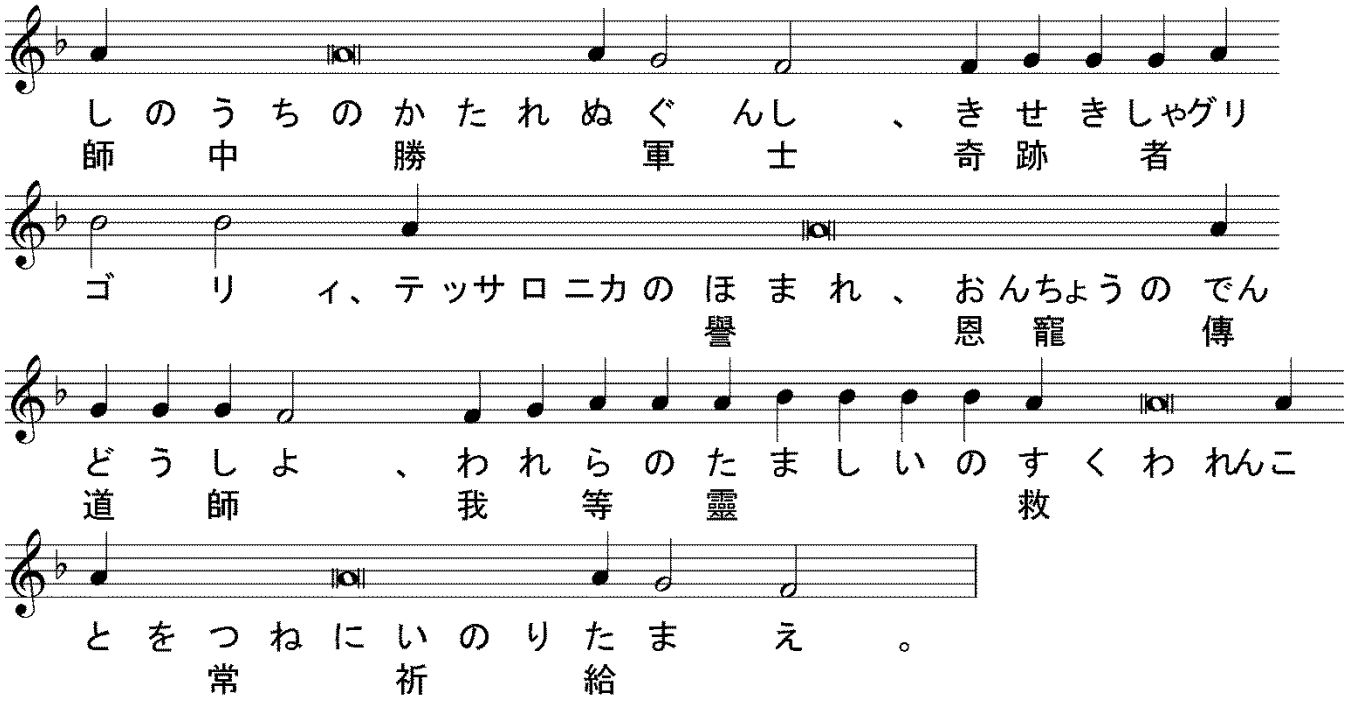
【　復活のトロパリ　第６調　】

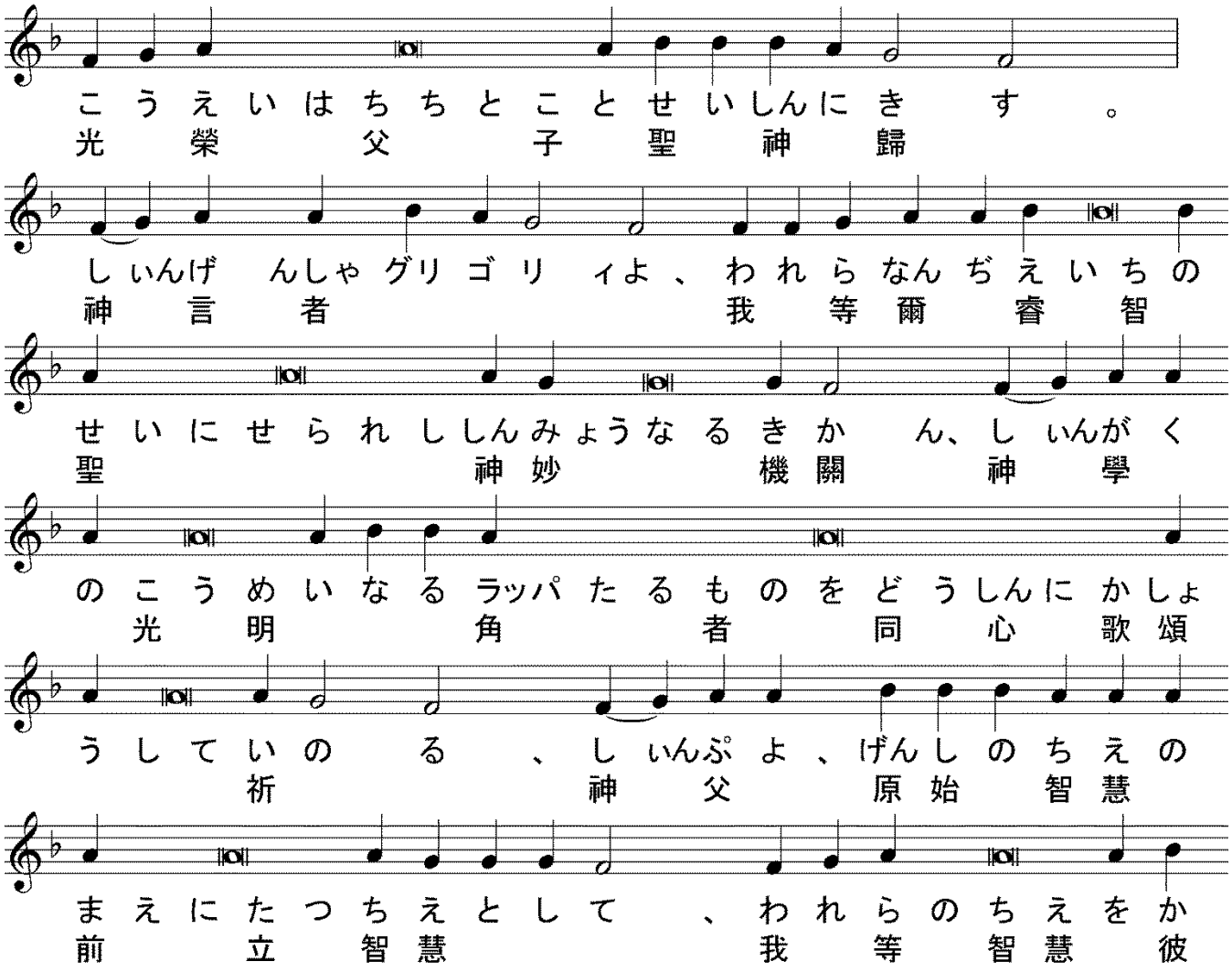


【　グリゴリイ・パラマのトロパリ　第８調　】





【　グリゴリイ・パラマのコンダク　第８調　】



れにむかわしめたま　え　、われらがよばんた
向　給　我　等　呼　爲

めなり　、おぉんちょうのでんどぅしよ　、よろ
恩　寵　傳　導　師　慶

こべ　。

【　大齋第二主日のコンダク　第４調　】

いまもいつぅもよよに、アミン。
今　何　時　世　世

いまきんぎょうのときはあらわれたぁり、
今　勤　行　時　顯

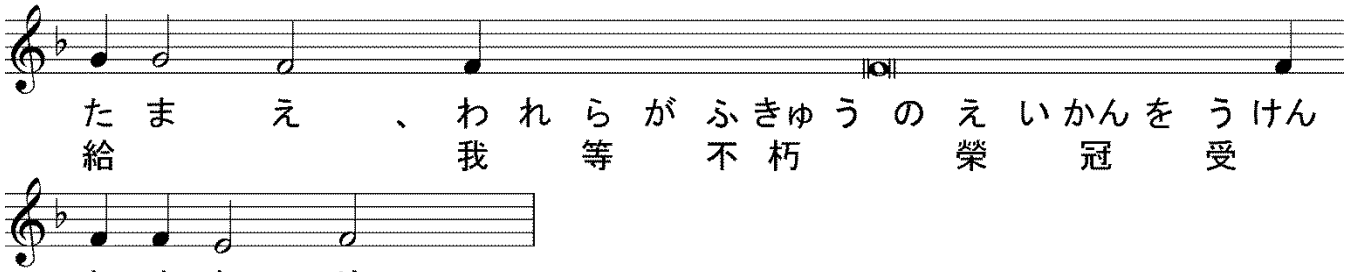
しんぱんはもんのかたわらにあり　、ゆえにたち
審　判　門　側　故　起

てものいみし、しょうかんのなみだときょうじゅつと
齋　傷　感　涙　矜　恤

をささげてよぉばん、われらはうみの
捧　呼　我　等　海

まさごよりおおくつみをおこなえり　、
砂　多　罪　行

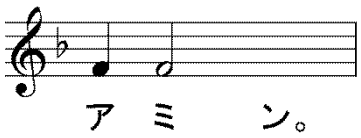
もとむ、ばんゆうのぞうせいしゅよ　、ゆるし
求　萬　有　造　成　主　赦

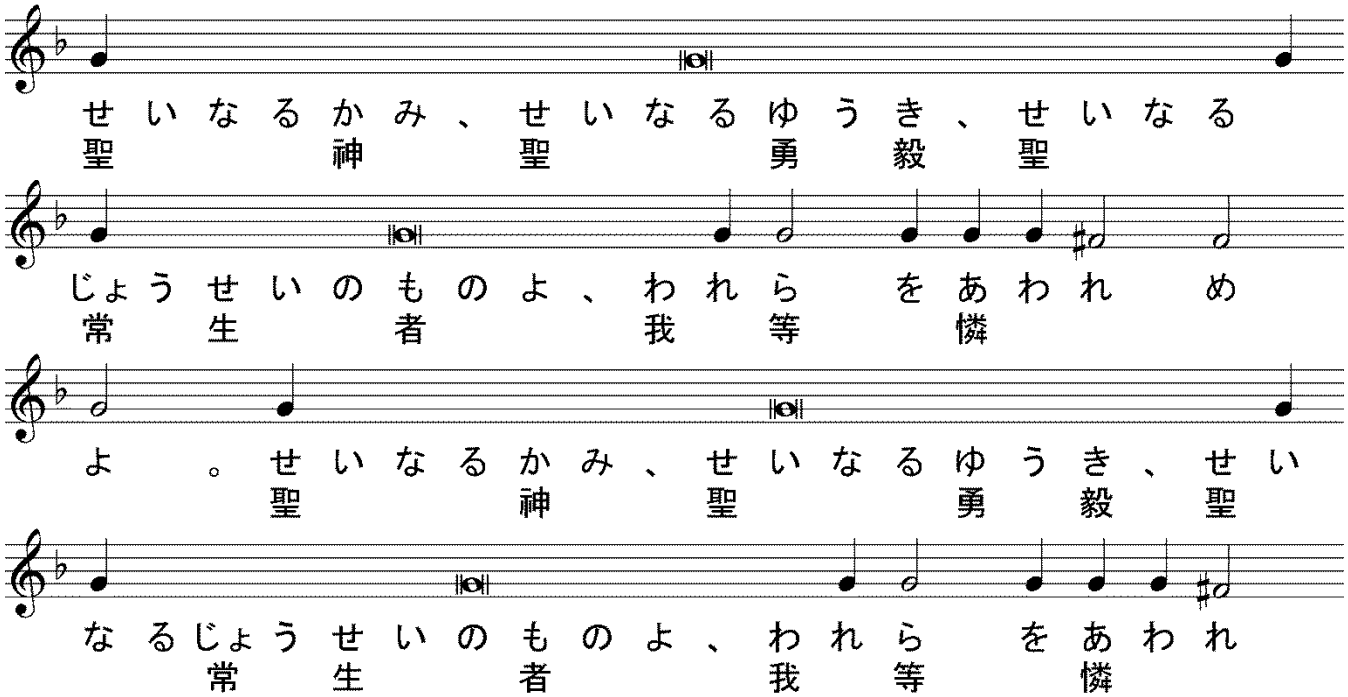


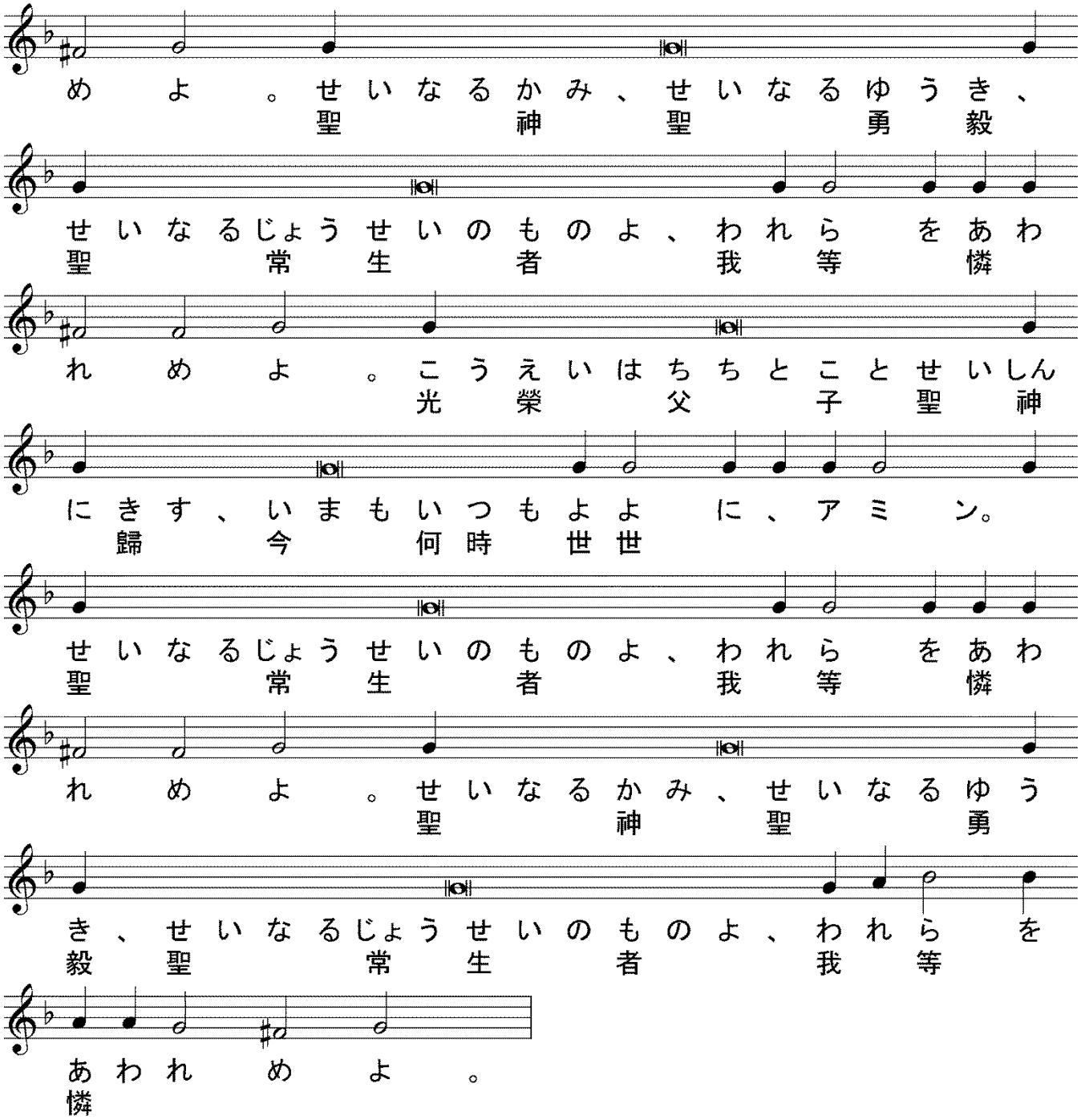
【　聖三の歌　】

代禱）主(しゅ)よ、敬虔(けいけん)なる者(もの)を救(すく)い、及(およ)び我等(われら)に聆(き)き給(たま)え、

代禱）世世(よよ)に、



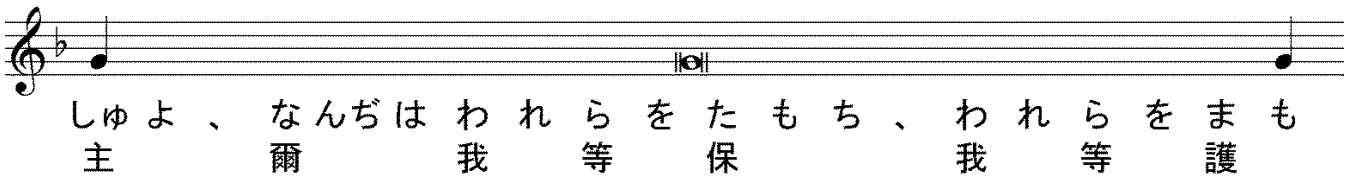


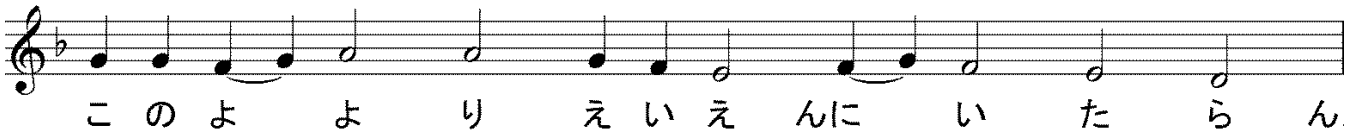


【　提綱（プロキメン）主日第５調　及び　成聖者の第１調　】

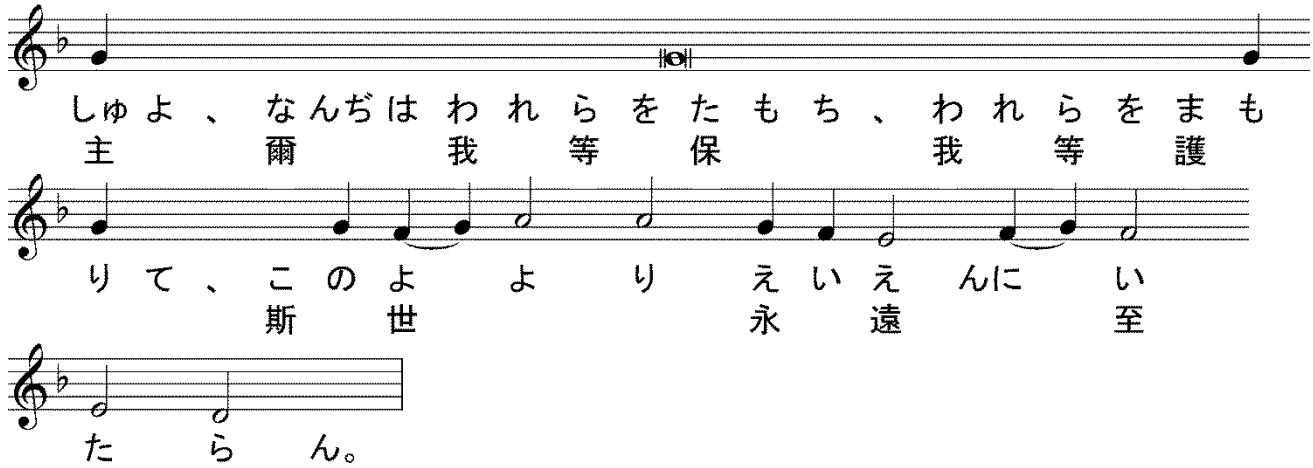
代禱）睿智（えいち）、

誦經）プロキメン、主（しゅ）よ、爾（なんぢ）は我等（われら）を保（たも）ち、我等（われら）を護（まも）りて、斯（こ）の世（よ）より永遠（えいえん）に至（いた）らん、

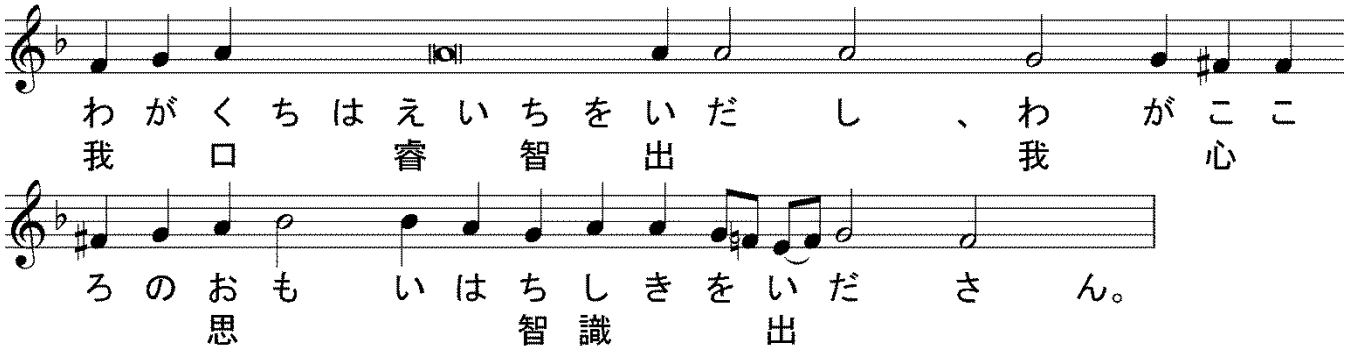




誦經）主よ、我を救い給え、蓋義人は絶えたり、



誦經）我が口は睿智を出し、我が心の思は智識を出さん、



【　使徒經（アポストロス）304端　エウレイ書1章10節～2章3節　】

代禱）睿智、

誦經）聖使徒パヴェルがエウレイ人に達する書の讀、

代禱）謹みて聽くべし、

誦經）主よ、爾初めに地を基けたり、天も爾が手の造工なり。此等は亡びん、然れども爾は永く存す、此等は皆衣の如く古び、爾衣服の如く之を捲き、此等は易らん、然れども爾は易らず、爾の年は終らざらんと。神は何の天使に對いて曾て云いしか、爾我が右に坐して、我が爾の敵を爾の足の凳と爲すに迄れと。彼等は皆奉事する神、

遣されて、救を嗣がんとする者の爲に役事する者に非ずや。是の故に我等聞きし所を尤慎むべし、恐らくは或は離れ落ちん。蓋若し天使等に藉りて告げられし言は堅く立ちて、凡の違背と不順とは公正の報を受けしならば、我等此くの如き救を顧みずして、如何ぞ逭るるを得ん。斯れ始主に因りて傳えられ、彼より聞きし者に因りて我等の中に堅く立てられ、神に縁りて、其旨に循いて、休徴、奇蹟、種種の異能、及び聖神の分予を以て證せられたり。

＊＊

（比較用　口語訳）「主よ、あなたは初めに、地の基をおすえになった。もろもろの天も、み手のわざである。これらのものは滅びてしまうが、あなたは、いつまでもいますかたである。すべてのものは衣のように古び、それらをあなたは、外套のように巻かれる。これらのものは、衣のように変るが、あなたは、いつも変ることがなく、あなたのよわいは、尽きることがない」とも言われている。神は、御使たちのだれに対して、「あなたの敵を、あなたの足台とするときまでは、わたしの右に座していなさい」と言われたことがあるか。御使たちはすべて仕える霊であって、救を受け継ぐべき人々に奉仕するため、つかわされたものではないか。こういうわけだから、わたしたちは聞かされていることを、いっそう強く心に留めねばならない。そうでないと、おし流されてしまう。というのは、御使たちをとおして語られた御言が効力を持ち、あらゆる罪過と不従順とに対して正当な報いが加えられたとすれば、わたしたちは、こんなに尊い救をなおざりにしては、どうして報いをのがれることができようか。この救は、初め主によって語られたものであって、聞いた人々からわたしたちにあかしされ、さらに神も、しるしと不思議とさまざまな力あるわざとにより、また、御旨に従い聖霊を各自に賜うことによって、あかしをされたのである。

＊＊

【　使徒經（アポストロス）318端　エウレイ書13章17節～21節　】

代禱）睿智、

誦經）聖使徒パヴェルがエウレイ人に達する書の讀、

代禱）謹みて聽くべし、

誦經）兄弟よ、凡の司祭長は禮物と祭祀とを獻ずるが爲に立てらる、故に彼も亦獻ずべき物なかるべからざりき。彼若し地に在りしならば、司祭と爲らざりしならん、蓋此には律法に循いて禮物を獻ずる司祭等、天上の者の形と影とに奉事する者あり、モイセイに其幕を造らんとせし時に、告げられしが如し、曰く、慎みて山に於て爾を示

されし式に遵いて、一切を造れと。然れども彼が今更に優れる奉事を得たるは、更に善き許約に基ける更に善き約の中保者と爲りしに稱う。

＊＊

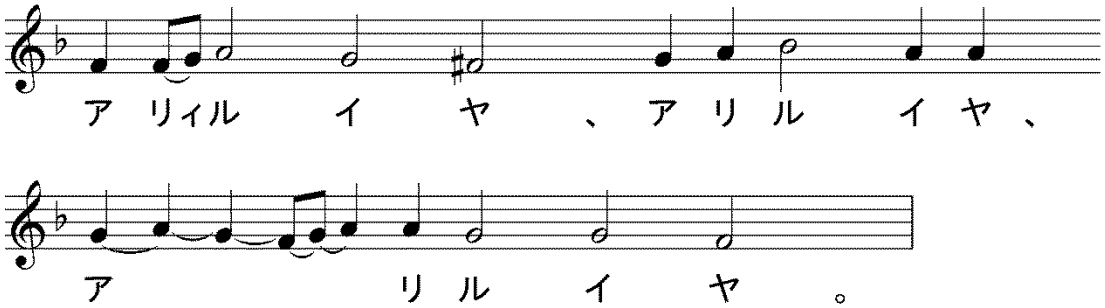
（比較用　口語訳）兄弟たちよ。おおよそ、大祭司が立てられるのは、供え物やいけにえをささげるためにほかならない。したがって、この大祭司もまた、何かささぐべき物を持っておられねばならない。そこで、もし彼が地上におられたなら、律法にしたがって供え物をささげる祭司たちが、現にいるのだから、彼は祭司ではあり得なかったであろう。彼らは、天にある聖所のひな型と影とに仕えている者にすぎない。それについては、モーセが幕屋を建てようとしたとき、御告げを受け、「山で示された型どおりに、注意してそのいっさいを作りなさい」と言われたのである。ところがキリストは、はるかにすぐれた務を得られたのである。それは、さらにまさった約束に基いて立てられた、さらにまさった契約の仲保者となられたことによる。

＊＊

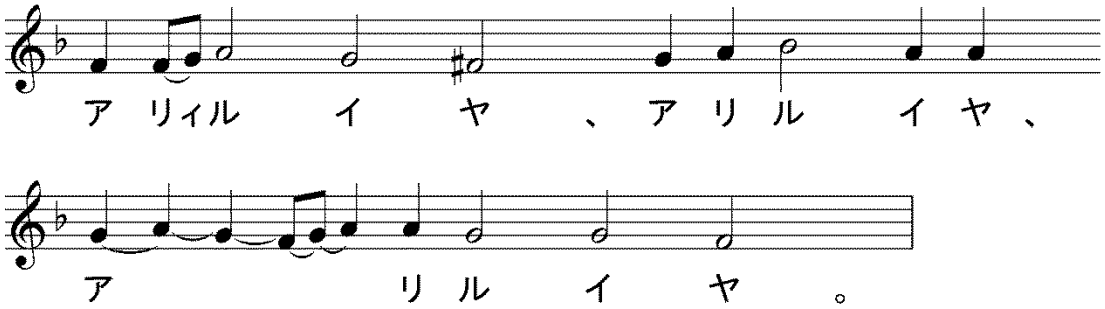
【　アリルイヤ　主日第６調　及び　成聖者の第２調　】

代禱）睿智、

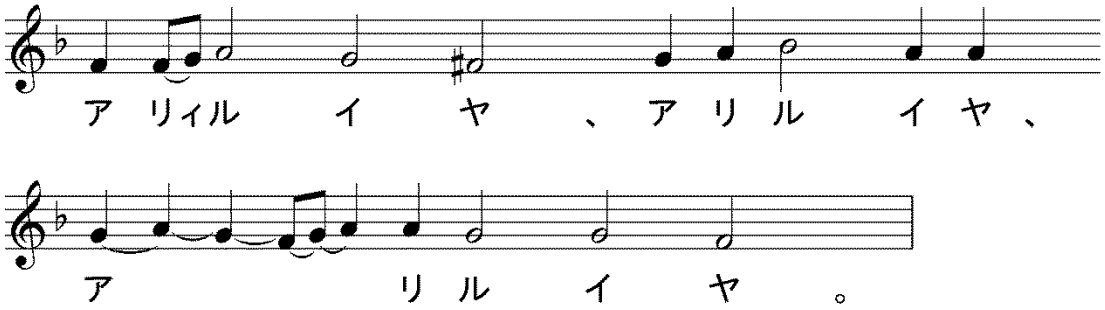
誦經）アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、



誦經）至上者の覆の下に居る者は、全能者の蔭の下に安んず、



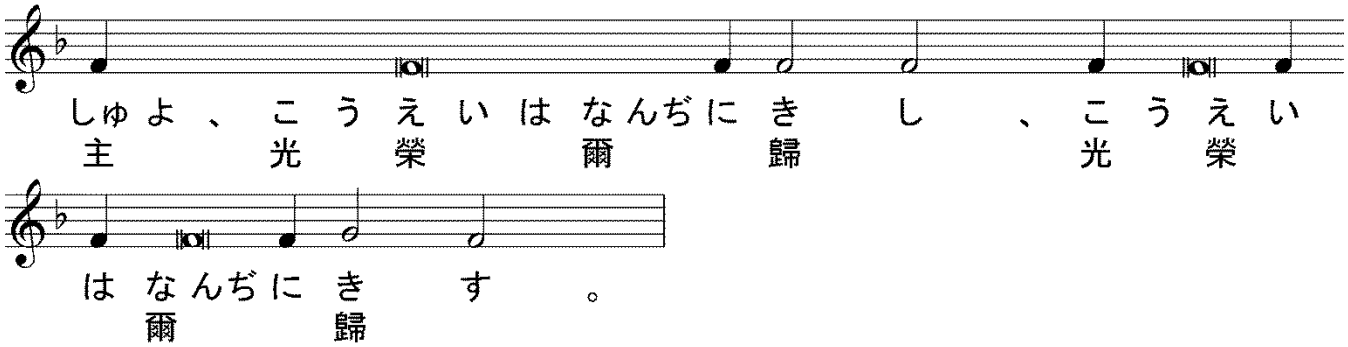
誦經）義人の口は睿智を言い、其舌は義を語る、



【　福音經（エヴァンゲリオン）　マルコ福音書７端　２章1～12節　】

代禱）睿智、

誦経）マルコ傳の聖福音經の讀、



代禱）謹みて聽くべし、彼の時イイススカペルナウムに入れり、彼が家に在ること聞えたれば、直に多くの人集りて、門の傍にも身を容るる處なきに至れり、彼は之に教を宣べたり。癩瘋の者を攜えて、彼に來れるあり、四人之を舁けり、人の衆きに因りて、彼に近づくを得ずして、其在る處の屋蓋を啓き、之に穴して、癩瘋の者の臥したる牀を縋り下せり。イイスス彼等の信を見て、癩瘋の者に謂う、子よ、爾の罪は爾に赦さる。此に或學士等の坐せるあり、心の中に議して曰く、斯の人何ぞ斯く褻涜を言う、獨神より外に、誰か罪を赦すを得ん。イイスス其神を以て、直に彼等が斯く己の衷に議するを知りて、彼等に謂えり、爾等何ぞ心の中に斯く議する、癩瘋の者に、爾の罪赦さると言い、或は起きて、爾の牀を取りて行けと言うは、孰か易き。然れども爾等が人の子の地に在りて罪を赦す權あることを知らん爲、（癩瘋の者に向いて曰く、）爾に謂う、起きて、爾の牀を取りて、爾の家に往け。彼直に起き、牀を取りて、衆

の前に於て出でたり、衆駭きて、神を讃榮し、我等未だ嘗て斯くの如きことを見ざりきと云うを致せり。

＊＊

（比較用　口語訳）イエスがまたカペナウムにお帰りになったとき、家におられるといううわさが立ったので、多くの人々が集まってきて、もはや戸口のあたりまでも、すきまが無いほどになった。そして、イエスは御言を彼らに語っておられた。すると、人々がひとりの中風の者を四人の人に運ばせて、イエスのところに連れてきた。ところが、群衆のために近寄ることができないので、イエスのおられるあたりの屋根をはぎ、穴をあけて、中風の者を寝かせたまま、床をつりおろした。イエスは彼らの信仰を見て、中風の者に、「子よ、あなたの罪はゆるされた」と言われた。ところが、そこに幾人かの律法学者がすわっていて、心の中で論じた、「この人は、なぜあんなことを言うのか。それは神をけがすことだ。神ひとりのほかに、だれが罪をゆるすことができるか」。イエスは、彼らが内心このように論じているのを、自分の心ですぐ見ぬいて、「なぜ、あなたがたは心の中でそんなことを論じているのか。中風の者に、あなたの罪はゆるされた、と言うのと、起きよ、床を取りあげて歩け、と言うのと、どちらがたやすいか。しかし、人の子は地上で罪をゆるす権威をもっていることが、あなたがたにわかるために」と彼らに言い、中風の者にむかって、「あなたに命じる。起きよ、床を取りあげて家に帰れ」と言われた。すると彼は起きあがり、すぐに床を取りあげて、みんなの前を出て行ったので、一同は大いに驚き、神をあがめて、「こんな事は、まだ一度も見たことがない」と言った。

＊＊

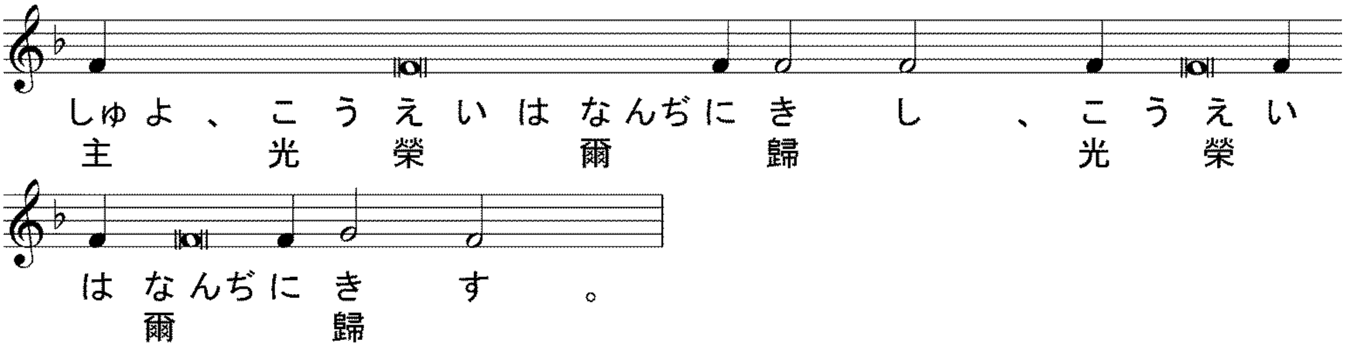
【　福音經（エヴァンゲリオン）　イォアン福音書 36 端　10 章 9～16 節　】

誦経）主は彼に來れるイゥデヤ人に謂えり、我は門なり、我に由りて入る者は救を得、且入り且出でて、草場を得ん。盜の來るは、唯盜み、殺し、滅さん爲のみ。我の來りしは、其生命を有ち、且豐に之を有たん爲なり。我は善き牧者なり、善き牧者は己の生命を羊の爲に捐つ。牧者ならざる傭者、羊の己に屬せざる者は、狼の來るを見て、羊を棄てて逃ぐ、狼は羊を奪い、又之を散す。傭者は逃ぐ、其傭者たるを以てなり、羊を顧みず。我は善き牧者にして、我に屬する者を識り、我に屬する者も亦我を識る。父の我を識るが如く、我も亦父を識る、且我が生命を羊の爲に捐つ。我に又他の羊、此の牢に屬せざる者あり、我は彼等をも引くべし、彼等は我が聲を聽かん、而して一の群一の牧者と爲らん。

＊＊

（比較用　口語訳）わたしは門である。わたしをとおってはいる者は救われ、また出入りし、牧草にありつくであろう。盗人が来るのは、盗んだり、殺したり、滅ぼしたりするためにほかならない。わたしがきたのは、羊に命を得させ、豊かに得させるためである。わたしはよい羊飼である。よい羊飼は、羊のために命を捨てる。羊飼ではなく、羊が自分のものでもない雇人は、おおかみが来るのを見ると、羊をすてて逃げ去る。そして、おおかみは羊を奪い、また追い散らす。彼は雇人であって、羊のことを心にかけていないからである。わたしはよい羊飼であって、わたしの羊を知り、わたしの羊はまた、わたしを知っている。それはちょうど、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同じである。そして、わたしは羊のために命を捨てるのである。わたしにはまた、この囲いにいない他の羊がある。わたしは彼らをも導かねばならない。彼らも、わたしの声に聞き従うであろう。そして、ついに一つの群れ、ひとりの羊飼となるであろう。

＊＊



※代式祈祷③　へ